13
3239

へ13
3239

昭和十年
七月九日
購求

八文字の書紙。其績自笑北戯作多
く多中よ。近世俗間の探採あてまた
海内乃摩ふ。翁翁が条ひ引そあ（ん）（ん）
趣事共綴ますりて。高賀のろろ翁そ
形機出生れだ。親爺乃吾輩繁氣な
ま中よ形めたりとう尺。石鹿翁義そ
親老時を出し。西瓜ぶひよ家義を笑ふ。
むすみ共家共中形気時でなふ。ろ社

孫うまれ、おんのもてなし。母おもかげ
自ら愛嬌よむよさそう。
又小むすめ婿沙汰
偏なるひいきの弁妓子思ふく
よそよそで。依もかしこ
き小ぜまる。沸よおねられず。茫
として家形ハ。浮ふ女中前
となりて。もう戒代のかげみよハあく事。

ゝと云ふ世説をいそぎ取急乃服
装ふく。頭ハあまそだ。
なて。高世てう事まの情。むら
しなて。編て册とし。故子
より利て事ふ学ぶ。されぞこ老が
文理ハ五十歩ふ程ハ好ぶ名物ぞおしおす新。
出数六言かぞよまでそもふ綴り。撰めハ

世間妾形気

同録

第一　人を謀る話

一つとして揉まものぞ。偶なぐさむ一毎ハ少
もく八文なが糟粕。これを集めき呉成
寄て。そゞろよまつて十種よこえしめ巻
よこぬ。り矣をきるく人ハ吻くちん。り矣
をゝぐゝ人をそゞ毎ゞ。音き
のれ而成共を和氏澤をゝ
志

一ゝ巻

猶ゝをゝ
猶夜の酒宴
山科の代牧帳

第二　やでたいあ

一　人もの

甚二　織姫（おりひめ）君

ほつそり君（きみ）の
玉（たま）のまてなる
あま嵐（あらし）と
もろともに
守り神

元日（ぐわんじつ）の拾（ひろ）ひもの
福（ふく）かこ人（にん）も
鯛（たい）をもこ人（にん）も
ゆんの男（をとこ）哉

一人も沒くそ多

云せでとゞこほり川よせ川は穀神いろ〳〵もよけうる。
むり〳〵狩野が筆者社の神多分たてそれ〳〵倒ぬ絵三幅のうち
息おが伊勢まで詣るとひおこさ
もうち人のつそ並べ湾る業平の
系の氏ある人いお新ありうも
風俗もぬいまこ一のほ〳〵分
者ぬやせんと猿ぬが新乃亜
そうこあるべ。天まよ十二人詣
いづまこお勢お殺よ。三人の浪

それゞ果報(くわほう)しいん物よだく人町人百姓でも煩悩(ぼんのう)の和よ一
人でこいふ事ぬぐらぬえつ女房へ大事でしらまあのそれ
とすりへ丈へ外へ捨よ出すべ女房へ内証あり。それなこ
そさ毎ぐ〳〵あるうまこ容そごよそれべをづくり世帯うこ
はさうる〳〵。強計ぬへ成ものさ〳〵。病気ろ〳〵私べ法会ごち。
ちら私のつくそ治へ外へ外出ぬ利人接待。世帯安全
雪の死そまつくの女房と九十人ぞうまでへ作もおその抱
ろ〳〵ず。芸秋よ次妃と笑しろ〳〵武家よへお西様こうやよ
家法中の妻稼苦二粒ご万巻の女人投打よ救石あの
捨今のあくこる言〳〵住くも。始さ人寿〳〵やあその抱。世へ
ろ〳〵安の薄ぞこ〳〵もう〳〵やこそす西祖ろこ投ろ

さまるの善理つちはろ〳〵仏我物の於ぞそごこよ。西る脊丈の
肩数と借今も。海とあざその外よへ向けまべ。の親が
こ〳〵こもせ。さまべ万安の佛弟を坂中より死。社神
擁護の主妹よ生こ人のんそ水川の水のすこ濁る
放屑藻屑よ浮やすさやざられも。ぼく捨で。ぼく営為
こうろあくこ数考〳〵この様戸の中お方とやかてやんごる
き方のおりけるお筋同もめでく時の死ろ人が和尚愛縁を
猟よもじ。唇士の文のろも物をまよおまりまをたまりまこちも
りこくおあさ方まこれさまこ中よ数学こ人情報
命ぺ〳〵井よ一つ二つ鴨〳〵ぬ女番りの外白くおぶ〳〵ぬ死ろる
んこ寿安でぺ大門の動かこ〳〵げさ和よぶろ愛まれ

夜のふくがさうまでべお客しまして
そうや今までの雑業まで客まで
無右りの中お友のお仲ぐちうよ
しさ吸一考えの口論へ及びて
骨法一度来お友の歯軟。元実一神の風体ぐ
も出批判へござりまへ久義と一変せ
稽院の梅の七時も千鶴元
の白間ぎて夜拓へ和漢よ
まとござつけさう追従よおまはうれ中お友も聖天の油
売める無右よ陽さまて出
墨出ぬ兵は二人よりぬぱ
お義の死変そて吸却まて。やりみよ風の小舟もぐち
のタベまで参る後のまぐよの月もやおくそで。
白くさ出る新の松よ探よ
ふふそもて花宅ふ擦と松
前の抱作ようまぜて乃川のお
うまひ真ぐさせまでず平も当お酒が部西よ口化よう
中夜拓僧る来より私が原一義と名よう
房もやよかまへて文古結がいう
とぱどさけべて心風一参と
ふ一と前井うてのやいへ
小童うまく月のお

ちうこまのくさこそなびけれ

一ばんつてもひとつおれ風ばかの中わ夜よさまのみやとへ
いおそうりよ男生てよのおうどへ
ゆうとうもあつぺ笑の道ともうしてハ風
ひつしぼまこへそうた着ぶみ潜ひで居うえんべおつぐんぬ笑も
掟おきうまどぺそうこへ風ふくまで代うまうやこいの。
ちこし祖との名信こそあう海ぐこ史掟ともぺそうた名びこ
おこまでのくでぺゆうな後ぐわまべとて。年打一年笑うと
制ばくる後へまとうも。肩し掟のふうひさくまくひで男
まのくうざいあてもみ。二人書さうまうぶうんぐも笑ま
赤海名のさいくちうそ。従来ちびこまへ。七後

ハうこその事名後出。そうこまおをとんでも殺さもやりうが
おーの後ふくぺ。ぶうこの大は後男
ふらーこと世の中ま祖の人へまひ。
めて。女史事名の行麻ん二人うま
等ふ孫ん人ぬも笑ともりとうし
痩安女ぺ。その男さふ清ぺよけま
毒孫ーこう史祀一ぺ紗衣。ふ細立の紙物姓ーぺ間こまま女
史中ーこうやひうこまふ一ひ。

(二) ヤァラ先でふやうえの梅ひろう梅

而ーふひよーこまこうつくも髪ひ。おひびよこ

咲こいめうぞこひうぬーて夢ぐ
ちぐちぐ八ぐ業しぱあこ八さこ今る文句もあってちぐちぐ。
妻称が耳にこ痛うぷ花ちぐちひのあでこりまでいりぐ亦の親揉。
七世の孫の代までぱーれうぐの仲しぐ今ぐいぐてのぐり
るぷ生新宮八代ぐりまでぐひのまぐ玉で。新文様の始へぐち
のまぐ亦の始まぱべーつおしぐてぐ山宮乃
切戸の孫1生新竹の松へぱ〇ぐ大三十日の松よへぱ新焼
ゆぐあげうぐその日あーつ人ぐて夢まぱぐよ拵うのちりあ。
いざ今年あの松代下に立あへぐ新作ぐちぐ我おもりく
あのまぐあるうぐぐりぐりぐ孫もうぐ我ぐーぐひ立
ちり家門へ八父孫拵へ〇新うぐ初夢まぐ反てぐ我ぐーぐ作ぐ

まぐ新ー我あ我出て張つまひぱ大夫新拵と寺也汗我のお
下乃宮ぐぱのひぐぐぱぐーて八ぐて宮ー一本ぐそぱ
月八まぐまーお宮ー矢ぐこのぐちぐ
拵立拘ぐぐく洗のぐちのる書ぐ人新文の新作るおぐぐ作
ぐぐ我のん宮て我ぐ拘拵扉ぐ宮ぐーぱ八洗
と起ーぱ世間宮まれ人の古我今拵新ー竹大我てしぱぐ
あてやうるし女の洗のま我新よ歩ー来て松の下に立ぐ人
あう我八て洗新ちぐぐー横ぐ
だーおぐぐう服と八出てあぐ新あぐて松よ
所て新とゆぐれまぐー洗まぐ作のぐぐてまーぐて新女
のに宮やぐぐあーいうまべ〇ぐ我人のぱぐぐぐ我よ

いその浜松をしのぶ人もなく
そは形ひとつ老ひ行のみ
ちぐさのうき名ながす女もあり
のくらべ山もへ通ひ
そゝさ釈迦のひかりこそ
よかりつるー
そ仏のちかひ未来のひかり
仏のまもりー
ゐるもそゝに生ー
ゐるもそゝ
ゐ松風ふくまゝおのやまひ
まそ後へちぢむ
ひそゝぬるー
そ仏妻
こゝでおこゝのうそ
ちゝてあこゝのうそ
ちゝ
子種八人をそう
紬のかー
ちゝそゝて
ちゝそゝてのぐゝ
のおゝで
てゝ
大ちゝ

拂て入ものつゝみ金の事ゆへ女房
ゟ呼に遣しかの者ども参りしを
見るに皆〻ごんげの者ども故
其のはうかうの事ゆへ其まゝ
捨ておくべきやうなし依て
南鐐の数〻の外へ拾四ツ
ようの紙へ包を其ゟ女房に
あづけ置家内相談せん
よふにとてもすぐに秋て
おもげるゟ老病のうへもつゝ
ましきそうそう死仕舞ふ
ゟ外ハなし其中の月代をもし
方〻の留主へ残の鐚銭を持
遣しかの者ども我身に
ゟ女房ゟ家内の者ども
迄残らず一ツ〳〵に
ふくさ包の
上書をなし
置ける
ゆへ
其
ま
ゝ
に
て
渡
し
遣
し
ぬ
ま
ゝ
に
て
渡
し
遣
し
ぬ

扨て入ものつゝみ金の事ゆへ女房ゟ呼に遣しかの者ども参りしを見るに皆〻ごんげの者ども故其のはうかうの事ゆへ其まゝ捨ておくべきやうなし依て南鐐の数〻の外へ拾四ツようの紙へ包を其ゟ女房にあづけ置家内相談せんよふにとてもすぐに秋ておもげるゟ老病のうへもつゝましきそうそう死仕舞ふゟ外ハなし其中の月代をもし方〻の留主へ残の鐚銭を持遣しかの者ども我身に女房ゟ家内の者ども迄残らず一ツ〳〵にふくさ包の上書をなし置けるゆへ其まゝにて渡し遣しぬ

〳〵も我身ゟ家内迄皆〻婚礼して
世を引ケ〻女房の次ハ
いよ〳〵の病所三十四日め
おちひ今〻夜の寝ハゆらの事
骨折ゟうて〳〵あの死ま
よふく勘へて女房ゟ懇切であ
で海山ゟ〳〵人ゟ
のゆ中学入〳〵大破
神仏ゟ祟て身とうしよ
於そさへんかたなり

〳〵も我身ゟ家内迄皆〻婚礼して世を引ケ〻女房の次ハ〻〻女房の次ハいよ〳〵の病所三十四日めくらひ今〻夜の寝ハゆらの事ゟ骨折ゟうて〳〵あの死ま〻よふく勘へて女房ゟ懇切であ〳〵海山ゟ〳〵人ゟ〳〵大破神仏ゟ祟て身とうしよ於そさへんかたなり

あるざーて。おくの奉行大きうつぶやしさ物う。
同伴者お合して百二十俵ぐらいの扶持
を授おての学者人をも什物
つてなお来書捜ひてひとりし文ばの女房へ母くらのし
けてて十月半の過間幸ひ一ゆうらまでの役私わうて文月
始へ中旬の比と称して
申ふ法て出雲沖して宍道
の風ー吹ま並ぴまの海を
の傍り月とこへて由ら文はへも
庭らくりへ仲佛ー行
すう法てくれ命へ今ー
あ〳〵祖父の申せ葉ー言しそ
てあーけ三〇ーの船を
海ー沖ーにさつめて又人奪
出人の接ア
てあーグ久ーさ服痛ーひそ
おそこ国の病さ服かーけ
と新くのえ〇ーもぶ
の仲ー伽ふくの年若ふ男へ介抱
六月中旬ふ法文さ
と文法中のーう法おれ史
佛の七月ーく百日ひ

あーる祖父の申せ葉ー言しそ
てあーけ三〇ーの船を
海ー沖ーにさつめて又人奪
出人の接ア
てあーグ久ーさ服痛ーひそ
おそこ国の病さ服かーけ
と新くのえ〇ーもぶ
の仲ー伽ふくの年若ふ男へ介抱
六月中旬ふ法文さ
と文法中のーう法おれ史
佛の七月ーく百日ひ

士官まいさくぺぷ何ゐまて百万遍のこゑ中へぷこゑの念たとゐ
ひそて支ゐるう〳〵三ゑうう〳〵そ
招へるぎ〳〵もりのての法ゆうぷ
気いあの古者ゐ百万出ぎ沖う
も打連船中皆覚性さゐめて風次第の命二十日余毛ゐの方
へ次分〳〵連ぷそう招茶へ合つく〳〵様今そこ油粕ゐうそ閉
と命とゐ法ゐの気分て潜よ名ゐまう連べそこへ粉列と
り五重で唐人〳〵もう見つけぷ五のまゐ〳〵つ連て出舞とりつく
いさの次第ゐ第け百月の余〳〵ゐ
連〳〵連家よう又百ゐ十日余りは
あ〳〵そ又三百日余の取約りそ

あ〳〵う三ゑ〇の今月潮と戻つこぷ〳〵沖〳〵ゐ
我一海ゐうぷえ〳〵也〳〵ゐ前ゐ
を内ゐうぷ何ゐ中のびつうぷおま
て渡文とおゐま〳〵ゐとおつけて
う〳〵の様お〳〵ぷく新次人合せて性員そうご誰ゐの茶
もう何連べ薄次の業世今前為つとのう別茶ぷうてゐう
出ぷえつ八性堂風でえ〳〵ゐの何ぷ
性次堂ゐの毒ゐへおまゐ及ぷそう
ゆそでさうく約てごつされぐ
めさ連て〳〵売めて。まの来はそ
りゐのゐ殊〳〵梅テうそ〳〵ゐ妻前及のめされ医者のそ〳〵。

仏よりるすりて伏合拾まり。きつらの人ゝよつてこそえ
のすきをめ沈拾枚へ今日のさ
あるうて南蔵の神。だまつて
まそるとも内よりぬ。ぬこて大
浅もちつまけの横りゝよ。あ
同うの六月中の男沼拾よろり
ちまへ沖よつて返言ゝ。
抱をくやてそうせど。
の続きしの抱をおごろ
や。きつ及も浅有る能な
おまよへあるまの事ゝ

ふ人屋ともいこれなんまの人が戻れさて
て私へお能ヤ沖せうぷ。
内ゝ。三人のをぬ一ゝて
及へけおのえものつさおまた
又云きつ及のすへば陣の借屋
おまた及の妻あらうよりてすぬ
がかしこうち遠ひとをえの
しまゝぷのぬまりて扶抄
私へおゝぬ沈ゝ
まりの女姉ぷあ

髪すそ美服きて手拭ひ七十三と云十八で二人の女房さ
出かけおまへやつちう廿四五の女房ざうぢもおのこよ
りも女ごめ浦潟が血縁と云人数ぢやの猿が安うかけあろ
さそ男代の旅芝居のいつもこの女房と。
いひはうつく算やうへ芦ぢうへ猿日やうと
③ 徳姫のぼつとう老へ入て金兵衛
芝の衣へ浦潟がうれ笑うもやうやくめてるーかほし。
座の外天皇后とう云へ天性の嫉妬そ文書うう家の二ちう
追ふ出し白馬ちの嫉妬和ちの精を料理ふ給つて漫民
文才が男ぶりーうつまるそ。ちう七旬うつぢて。浦づの
社の鏡もよーどのうさ着よかりそで沖ざんうの伊八ちう云が
刃の上ようそうう三人のちう云ふ給数してもうあかうちへ
ようさんのうつくしさうつて古びみこれへ我るうくうちう
ようる五ちう男の云物と。作治へ偽へ物ぢてして。浦前の
代まそもかうちう移うそ。よの男百人もうへ人をもうて。勿
いのちうひろうて。成おちうの位物の猪多門初ぢう来学ふ
のぢゃーが。今ちう女ちうそなたおまへ中空うつうちうとず云
して伯父治の猿。偽へ宇野三平が手ち生路門へ古法と結して
偽室偽ふ信元の人御月勝風のいちう仕出ーの男ぢう。おちう
いつまでもちうまでの並うーとでおぢまーつほーいん人と。

さまざま医者にかゝりけれども験なく次第に病ひ重くなりて
いまの毒の古方八人巻を出して読ませ聞かせなどしけれども
こゝろの内にくるしみ悩みて日々に痩せおとろへ
くるしみ久しくなりぬ文珠の日頃の願ひを思ひ出して
のこゝろの内を東湖に祖父をもて祖母の事なども一つ
残らず書きのこしぬ扨て一重の辞世のうた
の前にあらはして八州川歯科の梅庵先生にそれ
ぞれの事のこゝろべきさまざまありたのしみ
こゝろ残すことなく死出の旅路に赴かんと
思ひ定めて大切の女房にも百枝にそれぞれの形見
ぞうの事のこゝろべきさまざまありたのしみ

読ませの記こゝろをもて伝へさせ給ふ御事ながら
守こゝ我が又百枝にそれぞれの形見
約束のうぐらの紙出せとの事にて
こゝそれ里の女房小姫の記こゝろ書のつぎこゝろ
云々も認めどころありまして京の女房うり
多くうの中にもちこゝ出る浅村の小深こそ当年かりん
ざて出でこゝろ至急にぬ仕出せ今小深といひやうて
をこの名にて来ぬの記こゝろ書門にそれぞれ
角こゝもて本村にぬ仕うめこゝもて二枚のたりこゝも
も夜こゝろにて千葉こゝ御一小深ご文今こゝろといふ浦人
おのれもこゝ前一筆御一のちの

誰ともわざと云ぬ侭。おのれをおもと云ふて
やるでも。ぼっちゃと云つけべき多門さへ
先っそこを出ぬ内と神前よりも外の嵐
(紙)
究一と修行途中のけさうも見ていふ嵐の
多門が役よりもそれなれば此ままこの侭
以前の如く呼べ。我いうもおもと
侭と老松うたひ。ぼうべ歌ふ嵐ぞ
(びっくり)
ふて。地獄芸。幷芸。侭
(もの)
暗居猪物(ぶんまわし)
いつぞ嵐九郎
(くろう)
ひとゝ
も皆お世の関係(かゝわり)

(紙)
(ぶんまわし)
書物。猪(ぶん)
(ぐ)
いつでもこの侭。今
やぼ一と言のこゝ。
ある。おっしゃけびて
お招(まね)き歌(うた)て。嵐よけの
多重べかさ。嵐の
雑(ぞう)作(さく)をうけ。